
ニセモノの映画

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニセモノの映画

【Nコード】

N2116L

【作者名】

sadaka

【あらすじ】

幼馴染みの川瀬友也は、モテる。それでもずっと彼女はいなかったから、あたしは安心してきっていた。けどあたしが友達の進藤あさみを紹介すると、二人は付き合いだしてしまっ……。

小さい頃からずっと隣にいた。気持ちを確かめたこともないくせに、そこはあたしの指定席なのだと思い続けてきた。だから友也があさみと付き合い始めたと聞いた時、本当はすごくショックだった。

幼馴染みの川瀬友也はモテる。昔からそうだったし、今に始まったことじゃない。けれど友也の心を射止めるような女はいなかったみたいで、ずっと彼女の席は空白のままだった。だからあさみが友也を紹介してほしいと言いだした時も、一度だけのつもりで気軽に引き受けてしまった。

「京子のおかげだよ」

何度も聞かされた科白をバカの一つ覚えみたいにくり返しながら、あたしの前で幸せそうに笑ってる女が友也の彼女の進藤あさみ。付き合い始めてまだ日が浅いから、ノロケたくてたまらないのだろう。このところあさみの口から出てくるのは友也の名前ばかりだ。

「ホント夢みたい。絶対無理だと思ってたのに」

あさみ以上にきつと、あたしがそう思ってた。どこにでもいるような普通の女なのに、友也はあさみのどこに惹かれたんだろう。

「彼、本とか映画とか好きなんだね。ちょっと意外だった」

本も映画もスポーツも音楽も、友也はなんでも好きだ。そんな事も知らずに付き合ってるなんて笑っちゃう。

「今まで彼女いなかったって、ホント？」

「……そうだよ」

モテるくせに女には関心ありませんっていう顔をして、友也は誰も寄せ付けなかった。唯一、幼馴染みのあたしを除いて。

「友也くん、モテるのにな」

そんな風に呼ぶな！ ちょうどいいタイミングで友也が現れなければ、あたしはそう叫んでいたかもしれない。

「あ、友也くん」

「よ」

あたし達のクラスに入って来た友也はあさみの前で足を止めて、それが当然のことのように彼女に応えた。そうやって親しげに友也を迎えるのも、今まではあたしの役目だったのに。

「どうしたの？ 何か用事？」

「ちよつと京子に用があつてな」

あさみに答えたあと、友也の視線があたしの方へ向く。だけど二番目に目を向けられても、嬉しくも何ともない。愉快な顔なんてしてられないから、友也に対する態度も自然とぶっきらぼうになった。用事があるって言われているのに口を開かないあたしを見て、友也はキョトンとした感じで首を傾げる。

「なにムズカシイ顔して黙りこくつてんだ？」

「……別に。なんでもないわよ」

「これ、借りてた本。サンキューな」

貸してたことすら忘れていた本が手元に戻って来た。家が隣なんだから、わざわざ学校で返さなくてもいいのに。

「続きは？」

「家にある。夜にでも取りに来たら？」

「オッケー。じゃあ帰り、迎えに来るから」

後半は寂しそうにあたし達の話聞いていたあさみに向かって言い、友也は去って行った。あさみの目が友也の背中を追っていたから、あたしはおもむろに顔をしかめる。

「京子と友也くんって、相変わらず仲いいよね」

嬉しさを噛み殺したような表情でそんなことを言われても、それ

は優越にしか聞こえなかった。

映画も音楽も冒頭の数分で止めて、ベッドに寝転がって本を開いた。だけど一番好きな読書も数ページで読む気が失せて、仕方なく本も閉じる。やっぱりダメだ。最近は何をしても集中出来ない。

閉ざした文庫を枕元に放って、起き上がる。そのままベッドを下りて窓辺に寄ってみても、カーテンを開けた先に求めるものを見つめることは出来なかった。見えるのは、明かりのついていない隣の家窓。そこは友也の部屋で、この時間に明かりがついていないということはまだ帰っていないのだろう。時間は、午後八時。誰と一緒にいるのかなんて、考えたくもない。

『そんな風に呼ぶな！』

思わずあさみにぶつけそうになった本音が、胸の奥でこだまする。お腹の底からこみ上げてくるような強い声は口に出すことが出来ない分、日を追うごとに激しさを増しているような気がした。イライラ、してる。自分で招いたことなのに。

「お前、何してんの？」

ノックもなく扉が開けられて背中から声をかけられたから、心臓が口から飛び出そうなくらい驚いた。慌てて振り返って見ると、そこにいたのは案の定な人物。あたしの顔を見て、友也は少しだけ眉根を寄せた。

「調子悪そうにしてたけど、病気か？」

「違っ……」

大声を上げそうになった自分に気付いて、あたしは口を閉ざした。なに、ムキになってるのよ。友也に噛み付いたって仕方ないじゃない。

「それより、何の用よ？」

自分でも分かるくらい、声が迷惑そうなものになった。邪険になんかしたくないのに、どうしても友也の顔を見ると平静でいられない。だけど友也は目を逸らしたあたしを怪しく思ってる風もなく、いつも通りの調子で言葉を重ねる。

「本、今夜にでも取りに来てってお前が言ったんだろ」

そういえば昼間、そんなことを言ったような気もする。でもあの時は上の空で、何の本を返してもらったのかもまったく覚えてない。

「何の本だっけ？」

「ああ、みつくろつてくからいい。しばらくジャマするぞ」

友也がいつもの調子で本棚に向かったから、あたしはベッドに移動した。ずっと友也を見てるのもなんとなく変な気がして、さつき枕元に放った本を拾い上げる。活字に目を落としてみたけど、やっぱり内容はぜんぜん頭に入って来なかった。

うちの両親と友也の両親は学生時代からの友達らしくて、昔から友也もあたしもお互いの家を自由に行き来してた。だから友也がノックもせずに入ってきて来るのは、いつものこと。あたしの本棚から好きな本を持って行くのも、いつものこと。なのに今は、心の距離感だけが違う。……やだなあ。痛いよ。真剣な顔して本に見入ってる見慣れた横顔が、もう他人のものだなんて思いたくない。

友也とあさみが付き合いだしたって聞いた時、目の前が真っ白になった。でも今は、突き刺さったまま抜けない棘みたいな痛みが胸の底に沈んでる。この傷はどうしたら癒えるんだろう。それとも、このままずっと疼き続けるの？

「なんだ、ないと思ったらお前が持つてんじゃん」

間近で声がしたから目を上げると友也の顔がすぐ傍にあった。友也のアップなんて見慣れていたはずなのに、その男とは思えないキ

レイな顔に胸が高鳴った。驚きを通り越した体は硬直してしまつて、あたしの手の中から本がすべり落ちる。床に落ちたそれを、友也は何事もなかったかのように拾い上げた。

「これ、まだ読んでない？」

ベッドのスプリングが派手に軋んで、その衝撃で我に返った。いつの間にか友也が隣に座っていて、あたしを見てる。さつき何かを言われたような気がしたけど、何を言われたのかはぜんぜん覚えてなかった。

「何が？」

「だから、昼間返した本の続きだよ」

少しムツとした表情をした友也が手にしていた本を掲げて見せたから、そこでようやく話が通じた。そうか、本の続きがどうのって話をしてたんだっけ。

「もう読んだから、持つて行つていいよ」

「あと、これとこれも借りたい。まだ読んでないやつある？」

さっきの本とは別に、友也の手には二冊の文庫が握られていた。

芥川龍之介に恋愛小説、それにサイコ系のホラー小説と、友也が借りたがっている本はジャンルがバラバラ。全部あたしの本だからひとのことは言えないけど、友也も相変わらず乱読型だね。

「本棚のは全部読んだから。どれでもいいよ」

「サンキュ。じゃあ、借りてくな」

数冊の本を持つて、目的を達した友也はあたしの部屋を出て行つた。階段を下りるトントンという軽い音がして、その後には扉を開く音が微かに聞こえてくる。たぶん、リビングから出てきたお母さんに「おやすみなさい」って言つて、友也はうちを出て行つた。

ただの幼馴染みとしてじゃなく、好きな人として友也を見つめ始めてから、もう三年くらいになる。他の女の子とは違う関係で、ずっと隣に居た。お互いに何も言わなかったけど、あたし達は間違いない友達以上の関係だった。けれどそれは『彼女』ではなく『幼馴染み』のままだったのだと、そう、気付かされた。

「でね、このあいだ映画見に行ったんだ」

あたしの前の席に座って自慢げにそんなことを言ってるあさみの話題は、相変わらず友也一色。付き合いは順調みたいで、彼らはデートを重ねている。その度にこうしてノロケ話に付き合わされるのだから、あたしとしてはたまらない。けれどあさみの話を聞く限りでは、二人の間にはまだ何事もないみたいだった。

友也とあさみが付き合い始めてから、どのくらいになっただろう。二週間くらいは経ってると思うけど、わざわざ数えてたわけじゃないから正確なところは分からない。でもそのくらい経てば、ふつうはキスの一つでも済ませるものなんじゃないの？　そこまで考えたところで、この話は頭から消し去ることにした。友也とあさみがキスする様子なんて想像したくもないし、そんなことを自慢げに報告されたら今度こそキレてしまいそう。

「真鍋」

不意に、誰かがあたしを呼んだ。それまでマシンガンみたいに喋ってたあさみが話を止めたから、あたしも彼女が見てる方に顔を傾ける。するとそこにはあたし達と同じクラスの男子、山口がいた。

「何？」

「ちよつと話があるんだけど」

「だから、何？」

「裏の駐車場まで来てくれよ。俺、先行ってるから」

「ここで言えればいいじゃない」

「ここじゃ、ちょっとな」

あさみをチラリと見て、山口は苦笑しながらそそくさと去って行った。変なやつ。言いたいことがあるならはっきり言えばいいのに。そう思いながら顔を戻すと、あさみが何故かニヤニヤしてた。

「……なに、その笑いは？」

「京子、鈍い。告白に決まってるじゃん」

「は？　ありえない」

山口とは同じ中学の出身で、同じクラスになったのも今回が三度目だった。山口は友也とも仲がいいから、中学時代はよく皆で遊んだりもした。だから、分かる。あさみが言ってるようなことは、ありえない。

「ほらほら、あんまり待たせると山口がカワイソウだよ」

一人で勝手に盛り上がり上がってるあさみが急かすから、あたしは仕方なく席を立つことにした。まあ、友也が来る前には帰るつもりでいたから、別にいいんだけど。カレシ面であさみを迎えに来る友也も、カノジョ面で友也を迎えるあさみも、見たくない。仲睦まじい登下校なんて見せ付けられたら、あたしはきつと立ち直れなくなるだろうから。

もう最初の下校の流れが落ち着いてる校舎を出て、あたしは山口が指定してきた校舎裏にある職員と来客用の駐車場に向かった。駐車場の脇には裏門があるんだけど、こっちは駅と反対方向だから利用してる生徒は少ない。山口が指定してきた場所はいわゆる、密談には最適の場所ってやつ。そんな駐車場の中でも車の陰になっている桜の木の下で、山口はあたしを待っていた。

「話って何？」

あたしがさっさと話を切り出すと、山口は何故か言いにくそうにしながら口を閉ざしてしまった。話があるって呼び出したの、山口でしょ？　それなのに山口が黙り込むから、あたしが代わりに言葉を重ねた。

「何で黙るの？」

「……あのさ、変なこと訊いていいか？」

「だから、何？」

「お前ら、付き合ってたんじゃないかったのか？」

「誰と誰の話よ」

「お前と川瀬だよ」

川瀬は、友也の苗字。山口が本当に変なことを訊いてくるから、今度はあたしが口を閉ざした。さっきまで言い出しにくそうにしてたのがウソみたいに、一度話を始めた山口は饒舌に言葉を続ける。

「中学の時からずっと見てたけどさ、別れたような素振りなんて全然なかったのに川瀬がイキナリ進藤と付き合い出しただろ？　だから、ちよつと真鍋が心配になったんだよ」

「……山口は誤解してるよ」

それだけ言つて、苦い気持ちで唇を噛む。友達以上、恋人未満なんて。そんな風に考えて楽しんですらいいた自分が馬鹿みたいだ。本当はずっと幼馴染みのままだったのに。

「誤解つて……えっ？」

「あたしと友也は付き合つてなんかないよ」

「マジで？　絶対デキてると思つてた」

「それに、あさみと友也を引き合わせたのもあたしだもん」

「何でそんな事したんだよ」

「あさみに頼まれたから。それだけ」

「バカなことしたな。お前、それでいいのかよ？」

「別に。本人達の問題だし」

「好きなんじゃないのかよ、川瀬のこと」

「どうして山口がそんなこと言うの？　関係、ないじゃん」

友也が好き。それは自分しか知らなかった言葉。でも、あたしが口にしなくても、きつとあたし達を知ってる人たちは皆そう思ってた。あたしは、そのことすらも知っていた。だから余計に、誰かに代弁された自分の気持ちが痛かった。

やばい、泣きそう。あたし、本当に友也のこと好きなんだ。

「俺、川瀬も真鍋のこと好きなんだと思ってた」

「……もういいよ」

「最後まで聞いてくれよ」

「何？ 笑いたいわけ？ あたしが一番おかしいに決まってるじゃん。馬鹿馬鹿しくて涙が出そうだよ！」

「そうじゃない！」

山口に怒鳴り返されるとは思わなくて、目を見開いてしまった。我慢してたのに、たまっていた涙が瞬きと同時に零れ落ちる。泣きたくない。泣いてるところなんて見られたくない。その気持ちだけで頭がいっぱいになって、山口に背中を向けてから急いで涙を拭いた。

「……こんな時に言いたくないけど、」

背中から山口の声がする。こういう時は黙っていなくなってくればいいのに、デリカシーのないやつ。悔し紛れにそんなことを考えてたら、山口はとんでもない言葉を後に続けた。

「ずっと、お前のことが好きだった」

……サイテーだよ。山口も、あたしも。

控えめなノックの音がした。でも今のあたしにはベッドから起き上がる気力がない。誰かと口をきく余裕も、もちろんない。

「京子、寝てんのか？」

ノックの音を黙殺してたら扉の向こうから友也の声が聞こえてきた。いつもは電気が消えてても平気で入って来るくせに、そんな言

葉を寄越すところを見ると今日は返事をしなければ入って来ないみたい。どうせ、あさみが何か言ったのだろう。そう思ったら友也の顔を見ることさえ嫌になった。

嫌だ。

嫌だ、嫌だ。

何もかも。

あたしが返事をしなかったから結局、友也は部屋に入って来ることもなくそのまま去って行った。

あさみなんかと会わせるんじゃないかった。こんなことになるくらいなら、さっさと好きだつて言つてしまえばよかった。好きに……ならなければよかった。幼馴染みのままだったら、きっと何も気にせず隣にいられた。彼女じゃなくても、特別なままでいられたのに。そう、思う。なのにまだ、友也のことしか頭に浮かばない。山口に告白された時でさえ、これが友也ならいいのにと思つてしまった。

友也が好き。もう、他人のものなのに。

あさみが憎い。彼女は何も悪くないのに。

自分が嫌だ。勝手に、他人を傷つけようとしている。

……どんな顔、すればいいのよ。友也にも、あさみにも、山口にも。そのことを考えると憂鬱すぎて、学校へ行くふりをして家を出たまま結局学校へは行けないでいる。だからって、こんな公園のベンチにいつまでもいるわけにはいかない。この先、どうしよう。いっそ消えてしまいたい。

「京子」

青い空がまぶしすぎて目を伏せていたら、背後から今一番聞きたくない声がした。あたしを呼ぶその声には聞き覚えがありすぎて、振り返らなくても相手は分かる。返事をしなくても素通りしてくれとは思えなかったから、急いで無表情を作った。

「お前がサボリなんて珍しいな。まあ、こんなイイ天気じゃさぼりたい気持ちもわかるけど」

呑気なことを言いながら、ベンチを回って来た友也はあたしの隣に座り込んだ。肩が触れそうなほど近い、いつもの距離。目を合わせて言葉を交わす必要もないくらい間近だから、あたしは友也の方を見ないまま口を開いた。

「学校、行かなくていいの？」

「俺がそんな真面目な生徒じゃないことくらい知ってるだろ。それ

より、昨日の晩は寝てたのか？」

「来たの？ 知らなかった」

少し驚いたような表情を作って、そこで初めて友也を振り向いた。特に訝しがつてる感じもなかったから、きつと平気な表情が作れたんだと思う。こうやって、これから友也を騙し続けていくのかな。本当は、ぜんぜん平気じゃないのに。

「お前が見たがってた映画。手に入ったから、一緒に見ようと思って持って行ったんだよ」

「見終わったら貸して。しばらくヒマになりそうだから」

「堂々とサボリ予告か？」

少し呆れたような表情で、友也が笑う。なに言ってたんだこいつ、的な顔をしながらも友也のあたしを見る目は優しい。見たくない。そんな表情で笑いかけないで。

「そ。もうガツコ行かない」

「三年くらいガマンしろよ」

「冗談に決まってるじゃん」

もう、自分でも何を言ってるのか分からない。こんな心の状態じゃ会話も成立しないよ。学校には行きたくないけど、このままここで友也と二人でいるよりはマシかな。そう思ったから、話を切り上げて立ち上がった。

「なあ、昨日。ホントに寝てたのか？」

歩き出そうとしたら、背中から友也の声が聞こえてきた。投げかけられた質問よりも、その冗談を消し去った声音にギクツとする。

振り向けなくて、あたしは友也に背中を向けたまま答えた。

「何でそんなこと訊くの？」

「お前、朝鏡見た？ ひでー顔してるぜ」

ひどい顔、か。きつと今のあたしは嫉妬に狂って、とても醜い顔をしていることだろう。鏡なんて見たくないよ。そんな自分、見たくない。

「……ま、いいや。ヒマなんだろう？ ちょっと来いよ」

いつまで経っても答えないあたしに痺れを切らしたのか、友也は強引にあたしの腕を引いた。抵抗する気力もなくて、友也に引っ張られるまま元来た道を引き返す。そうして連れて行かれたのは、なんのことはない、友也の部屋だった。

友也の家、それはあたしの家の隣ってことだ。いつも通り学校へ行くふりをして家を出たあたしがまさか隣の家にいるとは、お母さんも思っていないだろう。ちなみに友也の家は共働きなので、夜まで家の人は帰って来ない。

「久しぶりだろ？ お前、最近はちつとも来ないから」

そんなことを言っている友也の部屋は、前に来た時よりもポスターが増えていた。CDやらゲームやらも増えていて、ただでさえこったがえしていた部屋が足の踏み場もない。ここで、あさみと一緒にいたりするのだろうか。もう特別ではないこの部屋を自分から訪れようなんて気は、あたしにはなかった。

「いつ来ても汚いんだもん。たまには掃除しなよ」

「その汚い部屋の床に、何故座る？」

さらつと流してくれればいいのに、痛いところを突かれた。前はベッドが避難場所になっていたんだけど、もうそこへは行けない。だから汚い部屋の床に空いてるスペースを見つけて座り込んだんだけど、そんなこと口に出せるはずがない。

「どこに座ろうとあたしの勝手じゃん」

「……ま、いいけどね。何か飲む？」

「いつもの」

「りょーかい」

床に置いてあるものを器用にまたぎながら、友也は部屋を出て行った。友也が出て行くのを見送ってから、あたしは周囲に視線を走らせる。相変わらず、物が多くて汚い部屋。でも友也的には、これでも片付いているつもりなのだ。そんなことまでも、あたしは知っていた。

「はい、いつもの」

友也が戻って来て、渡されたのはオレンジジュース。そして友也の手にあるのは砂糖とミルクたっぷりの紅茶。友也があたしの好みを知ってるように、あたしも友也の好みを把握してる。幼馴染みって、そんなもの。でもあたし達の関係は、これ以上前へは進めない。……映画、見せてよ」

黙っていると痛い腹を探られそうで、怖かった。だから差しさわりのない話題を選んで口にしたんだけど、友也は何故か部屋中をひっかきまわし始めた。

「あれ？ どこやったかな」

棚や床の物が次々とベッドに放り投げられていく。昨日うちまで持ってきたって言ってたのに、何でないの？

「悪い、見つからねーや」

そう言って友也が苦笑を浮かべた時には、ただでさえ汚かった部屋が見るも無残な有り様になっていた。結局はあたしが手伝いを申し出て、二人で部屋の片付けを始める。こうして手伝わされるのも、前はしょっちゅうのことだったな。

ため息をつきながら片付けをしていたら、ふとあることが頭に浮かんだ。もしかしてあたしが見たがってた映画を見つけたって、口実だったのかな。だって、おかしいじゃない。昨日の今日でどこにやったか分からなくなるなんて。

「……ねえ、友也」

今まで、友也があたしに対して口実を使ったことなんて一度もない。訊きたいことがあるなら率直に訊くし、言いたいことがあるなら物怖じせずに言う。そんな付き合いが当たり前だったのに、もう口実がなきゃ気軽にあたしの部屋にも来れない間柄になっちゃったんだね。

「あたしに言いたいことが、あつたんじゃないの？」

「そうだな。気になってることなら、ある」

「何？ いつもみたいにハッキリ言えばいいじゃん」

「じゃあ訊くけど。どうして最近うちに来なくなっただんだ？」

「は？」

てつきり山口の話かと思つてただけに、拍子抜けした。友也とはいえば、ふてくされた子供みたいな表情であたしを見てる。何？
どういうこと？

「なんで、そんなこと訊くの？」

「だって、前は飯とか作つてくれたりしたじゃん。しょっちゅう来てたのが急に来なくなったらどうしたのかと思つて」

「あのさ、あさみに悪いとかフツウ思うでしょ」

「進藤？ 何で？」

「何でつて……家に呼んだりとかしてるんでしょ？」

「してないけど？ それに、それとこれは別問題だろ」

平然とそんなことを言つてのける友也に、あ然とした。何、それ。まるであさみよりもあたしの方が大事だつて言つてるみたいに聞こえるよ。あんたの彼女はあさみでしょ？ あたしはただの幼馴染みのはずなのに。

「前から訊きたかつただけだよ」

友也とあさみが付き合い出してから、ずっと疑問に思つていたことがある。今、それを訊かなきゃいけないような気がして、あたしは初めて友也にそのことを尋ねてみた。

「何であさみの話、しないの？」

すごく不本意だけど、彼らのキューピッドはあたしだ。彼らにしてみればあたしは共通の友人で、すごくノロケやすい存在だと思う。その証拠にあさみなんかは、毎日必ず友也の話をあたしに聞かせてくる。だけど友也からあさみの話を聞いたことは一度もなかった。

「言う必要ないじゃん」

あつけらかんと、友也はそう答えた。まあ、それは確かにそうなんだけど……。むしろあたしも、友也からあさみの話なんて聞かされたくないけど。でも、やっぱり、何かおかしくない？

「京子はそんなこと気にしないでいいんだよ」

極めつけに、友也はそんな科白を吐いてあさみの話を打ち切った。

あたしはって、どついう意味よ。そう思ったけど、それはさすがに怖くて、口には出せなかった。

付き合い始めて順調にデートも重ねているくせに、キスの一つもなければお互いの家に行くこともない。友也とあさみはしばらく、そんな付き合いを続けていた。最初は進展する関係なんて聞きたくもないと思っていたけど、ここまできると何かがおかしいような気がしてくる。だからある日、あたしからあさみに、初めて友也に関する質問をぶつけてみた。

「だって、そういうムードにならないんだもん」

くちびるを尖らせながらそう答えたあさみの顔は、すごく不満そうだった。自分の机に頬杖をついて、あさみは物憂げな様子でため息を零す。

「どうして友也くんは何もしてくれないんだろう」

どうして友也はあさみに何もしようとしないのか。その答えを、あたしは知っているような気がする。だけど答えを出す前に思考を閉ざした。だって、もしそうなら本当にバカみたい。それにもう、妙な期待は抱きたくなかった。また違っていたら、その時こそ本当に立ち直れなくなってしまうから。

「私、そんなに魅力ないかなあ」

「魅力なかったら付き合ってないんじゃないの？」

心にもないことを口にしながら、あたしは友也が言っていたことの意味を考えていた。あさみとあたしのことは別問題だと、あっさり言っただけの友也の気持ちが分からない。だいたい、何がどう『別問題』なのよ。あたしがあさみの存在を気にする必要がないって、どうということ？

幼馴染みっていう関係が、今はすごく重たい。今までは幼馴染みだからこそ一番近くにいられたけど、彼女ができた後までその関係を強要されるのは辛いよ。いっそ、友也があさみをあたしより大切に扱ってくれれば……。そんなことを考えてしまってから、自分の

バカさ加減に嫌気がさした。心にもないことを言っているのは口だけじゃないみたいだ。

「あ、友也くん」

視界の外であさみの嬉しそうな声を聞いた途端、あたしは立ち上がってしまっていた。とっさの行動を悔いる暇も余裕もなく、たまたま目についた山口に向かって歩き出す。こつちを見ていた山口は、奇妙な表情を作ってあたしを迎えた。声をかける気もなかったし、心の準備も出来ていなかったけど、こうなったら何か言わないと。

「あのさ、話あるから今日ちよつといい？」

「あ？ ああ……別に、いいけど」

山口への気まずさと、背後から感じる視線の板挟み状態がきつくて、あたしはさっさと話を切り上げてしまった。さすがにもう教室にはいられないので、自分の席からカバンをひたたくて廊下に出る。そのまま逃げ去っても、追って来る人はいなかった。

……あーあ、やつちゃった。あんなことメールか電話で言えばいいのに、わざわざ友也の見てる前で言ってしまった。言及してくれと言ってるようなものだけど、それでも友也は何も言わないかもしれない。あさみからアヤシイって話は聞いているはずなのに、友也は山口の話題には触れないから。

全てが曖昧で、嫌な感じ。けれどハッキリしてしまうのも怖い。それでも、山口には言わなくちゃ。一応告白されたのに、まともな返事はまだしていないから。自分が似たような状況で苦しんでるっていうのに、山口にまで同じ思いをさせていたくはない。そんなことを考えながら歩いていたらケータイが鳴った。着信は山口で、彼も早々と学校を切り上げることにしたらしい。まあ、あんな状況で取り残されても授業どころじゃないよね。

待ち合わせ場所は駅から少し離れた住宅街の中にある公園。待ち合わせに便利な変なモニUMENTの前で待っていると、山口はすぐに姿を現した。話をする距離で山口の顔を見ると、改めて思う。気まずい。

「お前なあ……」

「ごめん」

山口が呆れた様子で何か言おうとしたのを遮って、頭を下げた。山口は言葉を切って、それきり反応がない。あまりにも反応が遅かったから黙って立ち去ったんじゃないかと、顔を上げてみた。だけど予想に反して山口はまだあたしの前にいて、じっとあたしのことを見てる。この無表情はどういう時の顔なんだろう。

「とりあえず、そこに座れ」

山口がベンチを指差したから、あたしは言われた通りにした。端の方に腰を下ろしたあたしから少し距離を置いて、山口も隣に腰を落ち着ける。

「で、その『ごめん』の意味は？」

「色々」

「色々、ね。まあ、お前らしいわ」

意外にも、山口は明るい調子で笑った。笑うしかない、っていうのが本当のところなのかもしれないけど。

「それよりお前、いきなり声かけてきていきなりいなくなるなよ。おかげで進藤からあれこれ尋問されただろ」

告白関係の話は『ごめん』の一言で済んでしまつて、山口はさつさと別の話題を切り出した。そのあまりの淡白さに妙な感じを抱きながら、あたしは眉をひそめる。

「尋問つて？」

「京子に何したんだーとか。色々」

「色々、ね……。友也は、何か言ってた？」

「何も。あいつ、お前に用があつたみたいだぞ」

「別に家が隣なんだから。用はいつでも聞けるよ」

「……お前さあ、わかりやすい性格してるよな」

「は？」

「川瀬がいきなり現れたからとっさに声かけただろ、俺に」

……返す言葉がない。そんなところまで見てなくてもいいのに。

恨めしい気持ちで山口を見ると、山口は笑っていた。

「真鍋の気持ちなんて誰でも知ってるよ。あの時はつい口がすべったけど、俺のことは気にしなくていいから」

「……ごめん」

「それはさっき聞いた。ってか、ずっと前から知ってた」

「だったら言うなよ……」

「そうそう。そのくらいが真鍋らしい」

さっきからずっと笑っていたけど、その時の山口はとても爽やかにあたしの悪態を笑い飛ばした。けどすぐ、山口は真顔に戻る。

そのまま真剣な調子で、山口は言葉を重ねた。

「なあ、川瀬に告白しないのか？」

「それは……出来ないよ」

「だったら気をつけた方がいい」

「えっ？」

「言っただろ。真鍋の気持ちなんて誰でも知ってるって。進藤、あれ、たぶん気付いてるぜ」

そんなこと、山口に言われるまでもない。あれだけ露骨な反応をくり返していれば、あさみだって気付くだろう。現にあさみが友也の話をする時、たまに目が笑っていない。

「川瀬の態度がハッキリしないのも、問題だと思うけどな」

山口の言葉はすごく的確に何が一番の問題なのかを示していて、あたしは思わず何度も頷いてしまった。

友也の態度がハッキリしない。山口が言っていたように、あさみが一番不満に思っているのはそこだろう。誰がどう見ても『彼女』

のあさみより『幼馴染』のあたしの方が待遇が上だ。これであたしが友也の『彼女』なら、何の違和感もない。それに、すごく幸せだと思う。ただあたしが仲をとりもって、あさみと友也は付き合いだしたのだ。いまさら友也のことが好きです、なんて、とても言えない。あさみの気持ちを踏みにじって、自分だけ良ければいいはずがないから。それに、どんな形であれ、友也はあさみを選んだのだ。

友也の彼女は、あたしじゃない。その時点で、あたしは友也への気持ちを忘れなくちゃいけない。それなのに友也は、彼女ができてもちつとも変わらない。今夜もまた、ヤツはあたしの部屋で堂々と読書に熱中してる。こうやって毎晩のように部屋に出入りしている男への想いを忘れるなんて、もう拷問みたいなものだよ。

「あ、京子」

あたしの恨めしい視線を感じたのか、友也がいきなり顔を上げた。ついに早退の理由を訊かれるのかと、あたしは身構える。

「な、何？」

「飲み物くれ」

……無神経なのか鈍感なのかバカなのか。近頃の友也はさっぱり読めない。一人で悩んでるあたしの方こそ、バカみたいだ。

「いつものね」

「そ。いつもの」

友也の『いつもの』は砂糖とミルクたっぷりの紅茶。本を読むときや映画を見るとき、友也はたいていこれを欲しがる。あたしはあんまり紅茶を飲まないけど、しょっちゅう来る友也のためなのか、うちにはティー・バックが常備されていた。

「最近友也くん、よく来るわね」

キッチンで紅茶を淹れていると、リビングの方からやって来た母親がそんなことを言った。その言い方が微妙な含みを持たせているような気がして、あたしは眉根を寄せる。

「別に、いつものことじゃん」

「前は週に三日くらいだったけど、このところ毎日来てるじゃない」
同意を求められたけどそんなこと、わざわざ覚えてないよ。でも
言われてみれば確かに、少しは前よりもうちに来ることが多くなっ
たかも。特に高校に入ってからしばらくは友達と遊ぶばかりで、友
也の家を訪ねてもいないことの方が多かったのに……。そこまで考
えて、やめた。そんなこと考えても何の意味もない。

「余計なことは言わなくていいから」
「はいはい」

余裕の笑みを浮かべる母親を睨みつけてから、リビングを後にす
る。紅茶を持って部屋に戻るとあろうことが、友也はあたしのベッ
ドに陣取っていた。

「……あたしの居場所を奪わないでくれる？」
「悪い。床は尻が痛くなってきた」

あたしのベッドに寝転がったまま堂々とそんなことを言っただけ
の友也に退くような気配はない。あたしがこれだけ意識してるって
いうのに、こいつは……。

「あんた……何も考えてないでしょ？」

「は？ 何のこと？」

「だから！ フツウは女の子のベッドに寝そべったりしないっての
！」

「昔は一緒に昼寝した仲じゃん。何をいまさら」

「何年前の話してんのよ」

呆れてそう言い返しながらも、少し虚しかった。あたし達の関係
って、一緒に昼寝してた時から止まったままなんだね。そんなこと
友也があさみを選んだ時から分かった。でも本人に直接言われる
と、やっぱり痛い。

その後、友也が退こうとしないから結局ベッドには戻れなくて、
あたしは友也が帰るまでの時間を硬い床の上で過ごした。

「は？」

思わず、本気で呆氣にとられた。場所は人気のない授業中の屋上。朝っぱらからあたしをそんな場所に引つ張ってきた彼女は、今、何て言っただ？

「だから、別れたの」

無表情のまま、あさみが淡々と同じ言葉をくり返す。でも改めて言い直されてもまだ、信じられなかった。だって、本当に何の前触れもなかったから。昨夜も友也がうちに来てたけど、そんな素振りにはまったく見せなかったし。

「……ねえ、」

あまりの驚きに意識が飛んでいたけど、あさみに声をかけられてハッとした。よく見ると、あさみの顔がひどいことになってる。たぶん、一晩中泣きはらしたんだろう。

「友也くんってさ、本当は京子のこと好きなんじゃないの？」

あさみの一言にギクツとしたのは、あたしも薄々そう感じていたから。あたしやあさみだけでなく、たぶんあたし達の周りもみんなそう思っていただろう。けどあさみは『友也の彼女』でいる間は決してそのことを口にしなかった。その気持ちも、分かるような気がする。

「付き合ってる時もずっと、京子京子って」

真っ直ぐに見据えてくる赤い目が、あたしの罪を責めたてる。でも友也の本当の気持ちなんてあたしにも分からない。ずっと周囲が騙されていたかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。だけど、あたしは友也が好きだから。うしろめたい。

「……知らないよ、友也の気持ちなんて」

「でも、京子は友也くんが好きなんでしょう？　ずっと前から」

何も、答えられなかった。だけど、無言は肯定にしかない。

「最低!!」

あさみの怒声と共に、頬に痛みが走った。心にもそれ以上の痛みが刻まれる。最低なことをした。それなのに、彼らが別れたと聞いて喜んでいるあたしはもつと最悪だ。

「泣きたいのはこっちよ!」

あさみの声より少し遅れて、叩かれた頬を押さえた手になまぬるい涙が触れた。あさみが言うように、ここはあたしが泣くところじゃない。でも……。

「ごめん……ごめんね、あさみ」

「どうして謝るの!? それって認めるってこと!？」

「ごめん……」

「泣いてちゃわかんないわよ!!」

情けなくて、謝ることしか出来なくて、どうしようもなかった。

サイテーだとくり返しながら、あさみもだんだん涙声になっていく。結局その場はタイミング悪く姿を現した山口がなんとか仲裁してくれて、あたし達は授業が終わるのを見計らって教室に帰った。

玄関先に立つて見上げた隣の家は全体的に明かりが点っていないかったけど、手をかけると扉はカタンに開いた。カギをかけ忘れて出掛けるほど友也も無用心なヤツじゃないから、電気はついてなくてもたぶんいるんだろう。

「……おじゃまします」

そう言ってみても、どこからも反応は返ってこなかった。まあ、この薄暗い状態でどこからか声がしたらそれはそれで不気味だけど、やっぱり友也のお父さんとお母さん、まだ帰って来てないんだ。友

也は……部屋かな。

『真鍋と川瀬の仲がいつまでたってもハッキリしないから、こういうことになるんだぞ』

二階にある友也の部屋に行くために暗い階段を上っていたら、山口の科白が頭に浮かんできた。山口は自分も被害者のくせに、あたしにもあさみにも親身になって話を聞いてくれた。彼らに本当の意味で謝るためにも、友也とはきちんと話し合いをしなければならぬ。そう思ったからここまで来たんだけど、やっぱりいざとなると心が竦む。

友也はあたしのこと、本当はどう思ってるんだろう。ううん、友也の気持ちがどうこうじゃない。あたしがもつと早く気持ちを言葉にしていれば良かったんだ。あさみに仲介を頼まれた時も、あたしも友也が好きだからとちゃんと断っていれば良かった。すっかり扉が閉まっている友也の部屋の前で、そんな後悔ばかりが頭をめぐる。「ひどいわ!!」じゃあ私はカモフラージュだったって言うの!?!うなだれたままノックをしようとしたら唐突に女の声が聞こえてきた。ビックリしすぎて体が逃げてしまったけど、すぐに状況は把握できた。テレビの音、だ。

「俺はマリが好きなんだ。諦めてくれ」

「そんな!」だったら最初からマリに言えばよかったじゃない!!」男女の言い争う声は、あたしの部屋にもある本を映画化したもの。映画も見ただけなのに、科白を聞いただけでどんなシーンなのか浮かんできてしまう。よりもよってこんな時に、三角関係がこじれる話なんて観ていないでほしい。

「……友也、入るよ」

一応もう一回ノックをしてから、友也の部屋の扉を開けた。友也はいつも映画館の雰囲気で見たいからと家で映画を見るのにも電気を消す人だから、部屋の中ではテレビだけが光っている。今はひど

い顔をしているので、あたしにとっても電気が消えている方が都合がよかった。

「ん？ 京子じゃん」

振り向いた友也の顔がテレビの淡い光に照らされて、別人みたいだった。ドキツとしてしまったのはいつもと違う感じにときめいてしまったのか、後ろめたさからくるものだったのか、あたしにも分からない。

「そのままでもいいよ」

ベッドから下りて電気を点けようとした友也を制して、あたしはなんとか床に空いているスペースに腰を下した。その直後に友也がテレビを消したので、今度は本当の暗闇が訪れる。カーテン越しに外の明かりが見えるとはいえ、テレビまで消すとさすがに暗い。

「こんなに暗くていいのか？」

「うん。暗い方がいい」

「なら、映画でも見るか？ この前貸すって持ってってまた失くしたやつ、見付けたからさ」

「……うん」

今日は映画を観るためにここへ来たわけじゃない。だけど話の内容がどうしても気が進まないものだっただけに、思わず頷いてしまった。

「んじゃ、俺はいつもの持ってくるから。ベッドに座ってるよ」

それだけ言うと、友也は床に座ってるあたしを跨いでさっさと部屋を出て行った。さすがに自分の部屋だけあって、暗くてもどこに何があるのかよく分かってる。言われた通り、あたしは友也のベッドに移動することにした。ちょっと前まではそこへ近付くことさえ気が引けてたけど、今はそんなことどうでもいい。友也がフリーに戻ったからっていうのもあるけど、あたし達はもう、どうにもならないことが分かっているから。

友也のベッドに腰かけて頬に手を当ててみると、ひどく痛んだ。叩かれたのは朝のことなのに、まだ熱を持ってるような気がする。

痛いなあ……。誰かに思いきり殴られたのも、誰かを故意に傷付けたのも、初めてだったから。

「おい、ちよつと電気つけるぞ」

扉が開いて、友也の声がした。返事を待たずに部屋の電気が点いてしまったので、あたしは慌てて顔を下げる。

「そんなに眩しかったか？」

「目、痛い」

「悪い。じゃあ、ここに置いておくから。零すなよ」

枕元にある台の上に飲み物を置いて、友也はテレビへ向かった。

視界に入っていた友也の足が遠ざかったのを確認して、あたしは飲み物に手を伸ばす。オレンジジュースを一口含むと、食いしばっていた歯に凍みた。

「電気、消すぞ」

友也の声と共にまた電気が消えて、まだ何も映していないテレビだけが淡く光を放った。あたしの方へ近付いてきた友也はそのまま、隣に腰を落ち着ける。

「お前、頬腫れてない？」

「……気のせいだよ」

物語が始まる前の、作品紹介の間の会話。一緒に映画を観るにしても、いつもならこの時点であたし達に言葉はない。映画館だけじゃなく家で映画を観る時もそうなのは、宣伝から未だ見ぬ名作を発見出来るかもしれないからだ。この辺り、あたしも友也もそうとうな映画好きなんだろうなと、思う。だけど今日は、映像が始まる前から言葉を交わしてしまった。その時点で映画には集中出来ないだろうなと思ったけど、あたしはテレビに視線を固定したまま友也の方を向くことはしなかった。

あたしがずっと見たかった古い映画の内容は、ベタベタのラブストーリー。長年付き合っていたカップルが倦怠期を解消しようとお互いに承知で浮気をくり返し、結局は付き合い初めの気持ちに戻る。おおまかに言えば、そんな内容の話だ。原作は小説で、ラブシーンが官能的なまでに描かれていてドキドキした。濃厚な男女の関係をくり返し、くり返し描きながら、それでも純愛を失わない作品の雰囲気だ。神だと思った。

原作への思い入れが強いだけに映像で見るとイメージが崩れるかとも思っただけど、どうしても見てみたいシーンがあったからずっとビデオを探していた。映像で見てみたかったのは、小説の中でも特別な輝きを放っていた一言。ラストシーンで、彼氏が彼女に向かって言う科白。

『キスして、いいですか?』

この一言の重みといたら、他に類を見なかった。五年も付き合いあって倦怠期を迎え、それでも乗り越えて戻ってくる想いがあるのだとうちひしがれたのを覚えている。あたしが小説を貸したことですっかりはまってしまった友也ともよくその話をしたものだけど、さすがに今はそんな心の余裕はない。

「……ねえ、友也」

「ん? 珍しいな、お前が映画観てる時に話しかけてくるなんて」

「観ながらでいいからさ。訊いていい?」

「何を?」

「何で、あさみと別れたの?」

映画が中盤を過ぎて、ようやく本題が切り出せた。だけどテレビに視線を固定したままなので、友也がどんな反応をしているのかは

分らない。分かるのが怖いから、振り向けなかった。

「付き合ってみて、こいつじゃないって思ったから」

少し間があった後、友也はそんな答えを寄越してきた。話が感覚的すぎてあたしにはよく分からない答えだ。理解することに意味があるとも思えなかったけど一度口にしてしまった話題を簡単に終わらせることは出来なくて、あたしは結局その話を続けた。

「じゃあ、何で付き合ったの？」

「そんなの付き合ってみるまでわかんないじゃん。だから付き合った」

「それってさ、あさみのことが好きだから付き合ったわけじゃないってこと？」

「最初はな。でも付き合ううちに好きになるかもしれないし」

あさみのどこが良くて付き合ったとか、そういう次元の話ではないらしい。かといって、周囲が思ってたみたいにあたしのことを好きだったわけでもない。意中の相手がいなかったから言い寄ってくる相手と試しに付き合ってみた。そう、はっきりと言われてしまった。

やっぱり、友也があたしのこと好きだなんて思い違ってたんだ。それなのに自意識過剰になって、余裕ぶって、妙な思い込みをしてバカみたいだ。友也にとっては最初から、あたしなんてただの幼馴染みでしかなかったのに。

「……なんで泣くの？」

「映画、泣けるシーンじゃん」

話をしている時点で映画なんて見てない。だけど自分にすら言い訳にしか聞こえなかった科白にも、友也は何も言わなかった。テレビから聞こえてくる激しいラブシーンの声がこの上なく虚しい。早く家に帰って声を上げて泣きたかったけれど、せめて、この映画が終わるまではガマンしよう。

「May I kiss you？」

唐突に、友也が映画の科白を真似た。へたくそな発音に映画が終

わるのかとテレビを見てみても、まだそんなシーンじゃない。何か
と思って友也を振り向いてみても、友也の視線はテレビに向けられ
たままだった。

「このセリフを言ったときのダニエルの気持ちってさ、どんなだっ
たと思う？」

ダニエルはこの映画の主演カップルの、彼氏の名前だ。おそろお
そろ、確認するように問いかけるダニエルに彼の恋人であるアベリ
アが小さく頷き、二人がキスをすることでこの映画はラストを迎え
る。お互いに浮気を繰り返しながら、それでも戻って来た気持ち。
アベリアも自分と同じ気持ちでいるのか確かめる寸前の不安が、ダ
ニエルの弱々しいセリフには秘められていたと思う。だけど今、ダ
ニエルの想いを語り合うことに何の意味があるだろう。

「変わることにへの期待と不安。はつきりしてしまうことへの恐怖と
好奇心。ダニエルの一言にはそんな想いが隠されていたんじゃない
かと、俺は思う」

あたしが答えなかったから、友也は一人で話を続けた。質問の答
えを自分で明かしてしまってから、友也はそれまで注視していたテ
レビから視線を外す。真っ直ぐにあたしを見る友也の瞳には、あた
しが今までに見たことのない輝きが宿っていた。

「俺たちも試してみないか？」

「試すって……何を」

「今の関係を壊してみる、ってことだよ」

そう言つと、友也は返事も聞かずにくちびるを重ねてきた。友也
がさっきまで飲んでいたミルクティーのせいなのか、甘い香りがフ
ワツと広がる。だけど、すべてを忘れて呆けていられたのは一瞬の
ことだった。

「今、どんな気分？」

「……サイッテー」

心の底から最低だと思った。思わず握りしめた拳が、憤りで震え
る。

「何で？ どうしてこんなことするの！？」

「京子が好きだから」

いまさらでしかない言葉を、友也はあっさりと口にした。感情がこもっているのかも分からない、ひどく冷静な口調で。その淡泊な態度が、今は腹立たしくて仕方がなかった。

「だったら！ どうしてあさみと付き合ったりしたのよ！！」

「それとこれとは別問題だろ」

「……友也がなに考えてんのか全然わかんないよ」

「進藤とのことは京子に関係ないし、京子とのことも進藤には関係ない。それだけの話だろ。それで、お前は？」

「何……？」

「京子は俺のこと、どう思ってたんの？」

……分かってて訊いているとしか思えない白々しさが、ムカつく。ずっと、好きだった。そう言ってしまいたいけれど、言えない。だって、どんな顔してあさみに会えばいい？ 山口になんて言えばいい？ これだけ周りに嫌な思いをさせた後で、お互い好きだったから付き合いますなんて出来るはずがない。

「何で黙るの？」

「……」

「ちゃんと答えるよ」

「……好き、だった」

苦しいけれど、これがあたしの精一杯の本音だ。でも友也は納得がいかなかったようで、眉根を寄せてムズカシイ表情をしている。

「過去形？ 進藤と付き合ってる時の京子の態度、そうは見えなかったけど？」

「わかってるなら余計、言わせないでよ」

「何で？ 好きなら好きでいいじゃん」

「だって！ あさみに何て言えばいいのよ！？ それに山口にも……」

「山口と付き合うことにしたのか？」

「違う！ あたしはずっと友也が好きだった！」

「今も？」

「……好き」

乗せられた形で、あたしはけつきよく想いのすべてを打ち明けてしまった。小声で呟いたはずなのに予想外にはつきりと聞こえてしまったのは、いつの間にか映画が終わっていたせいだ。暗闇で淡い光を放っているテレビにはもう何も映っていないくて、ただの照明になっってしまった。それはあたし達の姿を浮き上がらせている。

「俺も。京子が好きだ」

この状況で何で、友也はそんなに清々しく笑えるんだろう。友也があまりにも無邪気にはしゃぐから、見ていられなくなったあたしは目を伏せた。

「もう、遅いよ」

「だから、何でそういうことを言う？」

「友也こそ、どうして今更そんなことが言えるのよ。……もっと早く言っただけよかった」

「お前こそ、もっと早く言えよ。俺はかなり焦れた」

「ちよつと。真面目に聞いてよね」

「聞いているよ。京子は俺が進藤をダシにしたって言いたいんだろ？」

「……そうだよ」

「だけどさ、そもそも最初に進藤を紹介してきたのは京子だろ？」

あれで俺は、お前にはその気がないんだと思っただよ」

「なにそれ？ どういう意味？」

「京子は俺のこと、ただの幼馴染みとしてしか見てないんだと思っただ。それなら他にも目を向けてみようと思っただよ」

「あたし、そんなつもりじゃ……」

「まあ、聞けよ。やけっぱちに思えるかもしれないけど、進藤のことはいいかげんに考えてたわけじゃない。京子が思ってるように利用しようとかも考えてなかった」

「真剣……だったの？」

「進藤は、イイ子だよ。好きになれるかなと思ったけど、やっぱりダメだった」

「それ、あたしじゃなくてあさみに言っで。後のことはそれから考えるから」

「……わかった」

足りなかった言葉を補っても、あさみが許してくれるかどうかは分からない。それでも、友也が初めて語ってくれた本音はうしろめたさと後悔しかなかったあたしの意識を少なからず変えた。意外にも純粹だった友也の気持ちに、応えたいと思っでしまった自分がいる。だから、してしまっでたこの後始末はきちんとしてたい。すべてはそれから、だ。友也にもあたしの気持ちは伝わったみたいで彼はそれ以上、何も言わなかった。

「そっか。よかったじゃん」

友也との話し合いがどうなったのか、それを説明するのにひたすら頭を下げるしかなかったあたしに、山口はこの期に及んでまでそんなセリフを投げかけてきた。しかも口調が、めちやくちゃ軽い。どんな顔してそんなセリフを吐いたのかと思って頭を上げたら、案の定、山口は涼しい表情であたしを見ていた。

「……ねえ、山口ってホントにあたしのこと好きだった？」

「さてね」

含み笑いの山口に、もしかしたらあたしはハメられたのかもしれない。友也で十分タチが悪いと思ってたけど、上には上がいるってことか。

「まあ俺はいいとしても、進藤が何て言うかじゃないか」

笑みを収めた山口の言葉に、あたしも神妙にならざるを得なかった。そう、すべてはあさみ次第なのだ。そのあさみは今、あたしと山口がいる屋上とは別の場所で、友也と二人だけで話をしている。「……だよね。そう簡単に許してもらえとは思ってないけどさ」

「川瀬がうまくやってくれるといいな」

「うん……でも、それは友也とあさみの話だから」

「川瀬が言いそうな科白だな。関係ないって」

苦笑いを浮かべながら話していた山口が、そこでふと真顔に戻った。山口の視線があたしを通り越していたから、あたしも振り返って山口が見ているものを目に映す。それまで放課後の屋上にはあたしと山口しかいなかったんだけど、いつの間にかあさみの姿がそこに加わっていた。

「じゃあな」

二人でちゃんと話し合えと言って、山口は屋上から姿を消した。あさみと二人きりになると途端に、気まずい空気が流れる。友也と

あさみがどんな話をしたのか分からないけど、今はひたすら頭を下げるしかなかった。

「……頭、上げなよ」

しばらく沈黙が続いたあと、あさみはそっけない調子で口火を切った。まだ怒っているのか、それとも呆れているのか。それは、顔を見なければ分からない。正直に言えばあさみの顔を見るのが怖かったけど、それでもあたしは頭を上げた。おそろおそろ顔を上げたあたしの目を、あさみは射るように見据えてくる。あさみに言葉を続ける気配がなかったのは、あたしが口を開くのを待っているからなのだろう。

「……あさみの言ったようにあたし、友也のこと好きだった。あさみに会うよりも前から、ずっと」

言葉でいくら謝っても、あさみには届かない。そう思ったから謝罪の代わりに、あたしは初めて彼女に本音を打ち明けた。だけどやつぱり、あさみの表情は動かない。無表情の彼女は冷たく、知ってたと応えた。

「本当は最初から、そんなこと知ってたよ」

「ごめん、絶対うまくいかないと思ったから紹介した」

「それも知ってた。自分だけは特別ですって顔して優越感に浸ってさ、なんてイヤな女だろうって思ってた。私が友也くんと付き合い始めてからは嫉妬丸出しにしてさ。正直、ざまあみろって感じ？だからわざと京子にノロケてた」

……返す言葉もない。優越感や嫉妬を隠そうともしていなかった自分が、ホントにサイテーだって思う。今のあたしに出来ることは、ただ黙ってあさみの叱責を受けることくらいだ。

「でも、もういいよ」

「えっ」

どれだけ責められても聞くつもりでいたのに、あさみがアツサリと言ったのけたのが意外だった。聞き間違いをしたんじゃないかと思って伏せていた目を上げると、あさみの表情にさらに面食らう。

彼女は何故か、スツキリした表情で笑みまで浮かべていた。

「川瀬くんがけっこう真剣に考えてくれてたことも分かったし。京子も我慢してきたんでしょ？」

「……………」

「叩いて、ごめん」

「許して……もらえるの？」

「しつこいよ。もういいって言うてるでしょ」

そう言っただけで笑ったあさみの笑顔は、出会った時のままだった。サ
イテーだと罵られるよりも、激しい怒りをぶつけられるよりも、そ
れが堪える。あたしは、なんて汚くてバカだったんだろう。あさみ
の清々しい笑みを見ていると改めて、反省しようと心から思った。

山口やあさみときちんとした話し合いをした日の夜、ちつとも集
中出来なかった映画のテープを手土産に友也があたしの部屋に来た。
友也の意図をすぐに察したあたしは暗黙の了解で立ち上がる。映画
を見るなら飲み物が必要だと思ったんだけど、部屋を出る前に友也
の声で動きを止められてしまった。

「京子、京子。そんなのいいからさ」

あたしの部屋を我が物顔で使っている友也はベッドにどっかりと
座り込んでいて、そこからあたしに手招きをしている。色々な意味
で眉をひそめながら、あたしは踵を返して友也の傍へ寄った。

「……………何？」

「いいから、ここ座れって」

友也が指差したのはベッドの際……というか、自分が座っている前だった。意味が分からなかったので従わずにいと、友也の手が伸びてきて強引に座らされる。その直後、突然背後から抱きつかれた。

「ちよつと！」

あたしが抗議の声を上げても友也の腕は緩まない。それどころかそのままベッドに引き倒されてしまった。

「何すんのよ！」

「いいじゃん。俺たち、もうただの幼馴染みじゃないんだしさ」

「気が早すぎ！」

近付いてきた顔を掌でおもいきり押し退けてやると、友也は渋々といった感じで体を起こした。ったく、何で急にこんな積極的なよ。あさみのあんな表情見ちゃった後で、すぐそんな気になれるわけないじゃない。

「あたしは映画が観たいの」

「……わかった」

真顔に戻った友也はあたしのベッドの上で座りなおして、だけど性懲りもなく自分の前を指で示した。甘い雰囲気になるのは諦めたみたいだけど、それだけは譲るつもりがないらしい。まあ、さつき『分かった』って言うてたし、それくらいならいいか。

「さ、遠慮せず再生しろよ」

後ろから抱きついてきながら、友也がいつもの調子に戻って言う。誰が遠慮なんかするかと憎まれ口を返しながら、あたしは手にしたリモコンで古い映画のテープを再生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2116/>

ニセモノの映画

2010年10月8日14時51分発行